



幕末の植物学者 牧野富太郎も高く評価

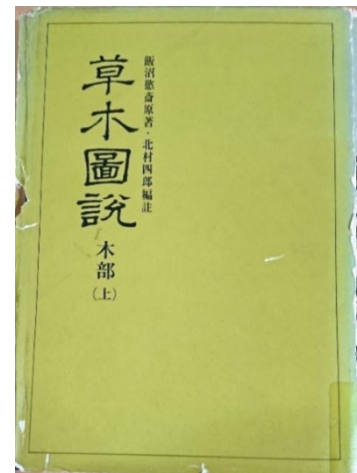
加藤良一 2023年9月7日



「飯沼慾齋」生誕二百年記念誌(1984)より

NHK連続テレビ小説「らんまん」の主人公のモデルとなった植物学者牧野富太郎と、富太郎に多大な影響を与えた岐阜県大垣市の植物学者飯沼慾齋いいぬまよくさいとの関りをテーマにした企画展『Inumae飯沼慾齋からMakino牧野富太郎へー植物へのまなざしー』が、2023年8月、同市の「奥の細道むすびの地記念館」などで開かれた。

この企画展は、牧野富太郎が「一代ノ偉人」と評した飯沼慾齋を知ってもらおうと企画された。



❖ 飯沼慾齋 略年譜

天明3年(1783) 伊勢国亀山(現・三重県)で生まれた。名を守之、後に長順、字を龍夫といい、幼名は本平。慾齋は、引退後の号である。

寛政6年(1794) 12歳 伯父である大垣の医師飯沼長頭ちようけんに学ぶ。

寛政12年(1800) 18歳 京都に遊学、漢方を学ぶ。

文化元年(1804) 22歳 長頭の養子となり、長頭の長女・志保と結婚し、跡継ぎとなる。本草学の大家小野蘭山に入門、これが植物学研究の発端となった。

文化7年(1804) 28歳 江戸宇田川榛齋に入門、続いて藤井芳亭について蘭学を修める。

文化8年(1811) 29歳 帰国後、蘭方医として大垣で開業。

文政10年(1827) 45歳 医術出精により藩主に御目見え、帯刀を許される。

文政11年(1828) 46歳 弟子の浅野恒進と刑屍体の解剖を行う。これが岐阜県下では最初の人体解剖となった。

天保3年(1832) 50歳 家業を義弟に譲り、自らは大垣郊外に別荘「平林荘」を築いて、研究・著述に没頭した。

弘化4年(1851) 69歳 顕微鏡を入手した。

安政3年(1856) 74歳 『草木図説』草部第一帙刊行

文久元年(1861) 79歳	『草木図説』草部第二帙、第三帙刊行
文久2年(1862) 80歳	『草木図説』草部第四帙刊行
慶應元年(1865) 83歳	病没。墓は大垣市安江町の縁覚寺にあり、大垣公園に顕彰碑が建っている。
明治40年(1907~13)	牧野富太郎、改訂版『増訂草木図説』を發行
明治42年(1909)	従四位を追贈された
昭和52年(1977)	『草木図説』木部刊行

❁リンネの分類に基づく『草木図譜』

飯沼慾齋が、『草木図説』を書き始めたのは別荘の「平林荘」へ隠退して12年ほど経ってからである。その間、どう過ごしていたかという、「余は屏居して客を絶ち、園に灌ぎて老いを忘れ、書を読みて日を消す」生活をしていた。

慾齋は、『草木図説』の草部前編20巻、木部後編10巻をまとめ上げているが、これは我が国で最初のリンネ分類法に基づく植物図鑑となった。草部は安政3年(1856)から文久2年(1862)にかけて全20巻版行され、木部は慾齋の死後120年たった昭和52年(1977)に出版された。

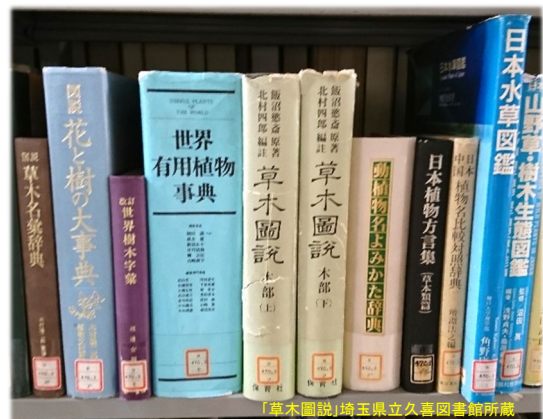
当時の出版技術の中心は木版であった。そのやり方は、原文や原画を丈夫で薄い紙に清書し、木の板に裏向けに糊で貼り付け、その上から彫刻刀のような鋭利なもので彫るといふもの。これが版木となる。版木の表面に墨や絵の具を塗り、紙を乗せてバレンで丁寧に押しつけければ仕上がる。



「幕末の科学者 飯沼慾齋」より

『草木図説』は出版当時、既に欧米ではリンネの分類法は古いとされ、新たな分類が行われていた。さらに、ダーウィンの進化論が嘉永3年(1851)に発表されていた。日本の植物学は鎖国のため欧米に遥かに後れをとっていた。

牧野富太郎は、慾齋を高く評価し、『草木図説』は「科学的に分類された日本植物を列挙記載した我邦最初の文献」だとして称賛した。富太郎は慾齋の住居「平林荘」を訪れ、植物を採集するなどしている。さらに『草木図説』に補筆し、『増訂草木図説』を昭和に入ってから出版した。



「草木図説」埼玉県立久喜図書館所蔵

❖ 慾齋と顕微鏡

顕微鏡を用いて植物学の研究をしたのは、慾齋が初めてといわれている。それまで目で見えなかったものが見えるようになり、格段に研究の効率がよくなったものと想像される。ところで慾齋が使った顕微鏡とはいかなるものだったのだろうか。

『幕末の科学者 飯沼慾齋』(岸武雄著)につきのように書かれている。

ところで、使っていた顕微鏡のことであるが、『三重県植物史』によると、「花しんの解剖ニ当り使用セラレン顕微鏡ハ、先生自ラ蘭書ニヨッテソノ構造ヲ研究セラレ、名古屋ニテ製作セシメラタルモノニシテ…」と書いてあるので、慾齋がわが国の職人にさしずして作らせたように思われていた。(……) しかし、その後なお研究が進められた結果、この顕微鏡の筒のネジが、インチを単位とするごく精巧なもので、ネジ切り盤がなかった当時のわが国ではとても作れない、たぶん1800年代前半のイギリス製のものであろうということになった。



『草木図説』に掲載されている顕微鏡解剖図は、2、30倍と必ずしも高い倍率のものではなかった。

❖ 本草学から蘭学へ 多才な慾齋

慾齋は小野蘭山らんざんについて本草学を学んだ後、宇田川榛齋しんさいに入門し蘭学を修め、その後大垣に帰り蘭方医を開業し名声を博した。文政11年(1828)には人体解剖もおこなった。60歳を過ぎても壮健で知識欲旺盛、自ら「慾齋」と号したことでもその意欲が窺われるという。68歳で自ら種痘を試み、70歳を越してから写真術の研究、80歳ではシーボルトとの会見を望んだが、シーボルトが帰国してしまいそれは果たせなかった。最晩年には、足を傷めたが、山駕籠に乗って深山まで植物採集に出かけるほど研究熱心であった。

❖ 合唱指揮者・飯沼京子さんは慾齋直系の子孫

合唱指揮者の飯沼京子さんは飯沼慾齋の直系の子孫である。飯沼京子さんが、冒頭で紹介した飯沼慾齋の企画展を見学したときのことをfacebookでつぎのように記している。許可を得て引用させていただく。

飯沼慾齋ゆかり 所縁の地めぐり

飯沼京子

飯沼慾齋の企画展『Inumae 飯沼慾齋からMakino 牧野富太郎へ - 植物へのまなざし - 』に行ってきた。その前に実家に寄り、置きっぱなしにしていた「増訂草木図説 草部」1巻や「草木図説 木部」上下巻などの著者や慾齋に関する書物、草木図説の下絵として描かれた自筆の絵を回収。

企画展は静かな一室にあり、同行の2人と悠齋についてぼそぼそ話しなが鑑賞していると、係の方に「悠齋さんに関係のある方ですか？」と声をかけられたので、「はい、先祖なんです」と答えた。すると、慌てて学芸員の方を呼んでくださり、悠齋の関係の冊子を何種類も持って来て、私に手渡してくださった。

そして、展示物について詳しく説明して下さったのだが、彼の悠齋への愛情が溢れるような話しぶりに、何だか私まで嬉しくなった。記念に写真を撮ってもらい、企画展を併催している郷土館や、悠齋が隠居して暮らしていた「平林荘」の場所を教えてもらい、何度もお礼を言って、郷土館へ向かった。

郷土館の一室には、先程とはまた違う物が展示されており、暫し眺めた後、胸像と悠齋邸跡を回り、車で10分ほどの「平林荘」へ。平林荘は現在個人の所有になっており、中には入れないが、正門の前に石碑があり、悠齋と平林荘に関する説明を記したのもあった。最後は墓参り。悠齋をはじめ代々の先祖や私の父が眠るお墓に手を合わせ、所縁の地めぐりは終了。

生誕240年の悠齋が残したものは、植物学の世界では重要なものだったようで(Linumaeの名がついた植物が幾つも存在している)、牧野富太郎にも大きな影響を与えた、とは昔から聞いて知ってはいたが、50歳で医者をやめ、60歳を過ぎてから「草木図説」を書いたことはもとより、好奇心や探求心が衰えることもなく、人柄も良かったと聞くと、とても親近感が湧く。その好奇心や探求心は、医学や植物学に留まらず、解剖や種痘、火薬の研究など多岐にわたり、門弟も多くいたらしい。足元にも及ばないが、私もまだ暫くは頑張ってみよう、と思ったのだった。



飯沼悠齋直筆の下絵(飯沼京子氏所蔵)

飯沼 京子・プロフィール

神戸女学院大学音楽学部音楽学科声楽専攻卒業。畑きみ子氏に師事。

歌曲を中心としたソロ活動の他、現代邦人作品の初演、合唱曲のソリスト多数出演。

ジョイントリサイタル、サロンコンサート等を意欲的に開催。



梅花女子大学合唱団常任指揮者、岐阜大学コーラスクラブ芸術顧問、関西学院大学混声合唱団エゴラド音楽監督、Sotto Voce、クリトメリア、KCクローバー、アンサンブル エヴォリュエ、猪名川グリークラブ、アンサンブル・アコール、KCユースクローバー、生駒倶楽部、かおん の指揮・指導、りそな合唱団、クロワール、コール・ルフトのヴォイストレーナー、東海メールクワイアー客演指揮

者を務め、リサイタル、コンクール、演奏旅行等の場で数々の成果を挙げているほか、客演指揮、審査員、講習会の講師等、活動は多岐にわたっている。また、大学合唱団との交流も多い。

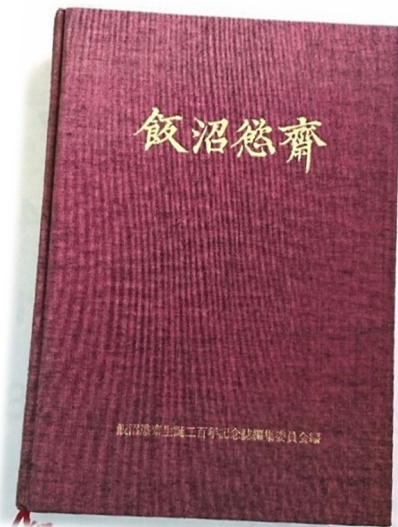
日本合唱指揮者協会会員、日本男声合唱協会個人会員、関西合唱連盟理事、大阪府合唱連盟副理事長、平成指揮者十人の会同人。

❖ 飯沼慾齋生誕二百年記念誌

昭和59年(1984)、飯沼慾齋生誕二百年記念誌編集委員会により編纂された『飯沼慾齋』という記念誌がある。

慾齋の生涯、植物学・蘭学医学・本草・化学との係わり、人となり、著作目録、平林荘所蔵目録、国立科学博物館所蔵目録、西村・飯沼・小島家略系図、慾齋年譜などからなる大部の書籍である。

序文に慾齋の功績を讃えてつぎのように書かれている。



埼玉県立熊谷図書館所蔵

飯沼慾齋は京や江戸ではなく、岐阜県の大垣で、幕末の1856-1862年に『草木図説』草部20巻を出版した。自身の費用で木版に刻ませた、この著作には江戸時代に知られていた多くの草のすばらしい写生図がある。この著作の日本の植物に関する知識は小野蘭山の『本草綱目啓蒙』^{ほんぞうこうもくけいもう}より得ることが多く、また自らも開発したものである。それらは従来の本草の記述や配列とちがって、西洋の植物学で記述され、リンネの24綱法によって配列されている。

また、巻末に収められた飯沼家略系図は、足利義輝が室町幕府将軍であった頃かと思われる、長常(道関)「武蔵岩龍山城主のち美濃に移る」から始まり、何代のちか数えきれない直系の最後に龍一と嘉子が結婚したところまで続いている。このお二人の子どもが飯沼京子さんである。

飯沼慾齋は、牧野富太郎に先行する植物学者であり、その研究姿勢は富太郎とも共通する極めて熱心な取り組み方であった。



[「虫めがね」Top](#)^



[「Home Page」](#)^